卒業生たちと再会の日に

津守　真

私共の学校では、毎年十二月の末に、卒業生たちが学校に集まる日をつくっている。卒業した子どもたちと再会するたびに、私はその子たちと葛藤しながら過ごした日々を思い起こす。子どもが必要としていることに応えるのには、大人にとって当然の常識的考えを変えなければならないから、そんな時期は毎日が自分との戦いである。そのお陰で保育者も親も自分の世界を広げられて成長する。

そのときのことなど忘れたかのように、卒業した子どもたちが集まってくる。

二十歳の青年Mくんは、千代紙をきれいに貼った小箱を十数個もって来た。そして、自分が気に入った人にあげて回る。みんな女性である。私の脇は通り過ぎていってしまった。この子は、かつて、職員の結婚式の前日に届いたデパートの包みをあけたがった。私は一生懸命にとめたが承知しない。この子は箱の蒐集をしていたから、たいがいの箱ならば私はあげたのだが、若い職員にとって大事な結婚式のお祝いの箱はあげるわけにはいかない。あげくに私は思いついて、同じような箱を探し、包装紙と紐をもって来た。Mくんは、私の手から奪い取るようにして、手際良く包みを作った。気に入った包装紙を貼って箱を作り替えることは、そんなころから始まったことを私は思い出した。手先の器用なMくんがいま作る小箱は、素人ばなれした美しい箱である。

このMくんのことを語るとき、既に本誌でも記したことだが、次のことを述べないわけにいかない。あるときMくんは、職員室の棚の教材を、どうしても保育室にもってゆきたがった。私は一年分のクレヨンや、糊や折り紙を駄目にされたらどうしようかと思い、必死になってとめたがどうしてもきかなかった。そんなにまで望むことには、私には分からない理由があるのだろうと考え、私も手伝って棚の教材を保育室に運んだ。Mくんは絵本ラックから絵本を全部おろして、その教材を分類して並べた。じきに私は、スーパーマーケットを再現していることが分かった。そこに至ってはじめて私共は子どもの考えに気が付く。大人が自分の常識を守ることに固執し始めると、自分とは違う世界を受け入れる余

地がなくなる。Mくんと一緒にいる大人は、いつも予期しなかったことをつきつけられて、自分の世界を広げなければならない葛藤の連続であった。親も私共もMくんのお陰でどれだけ心が広げられたかわからない。

Cくんは、内装専門店で、母親と一緒に働いている。母親の配慮で、午後三時までの勤務としてもらい、好きなことをする時間を多くしている。中でもCくんは町を歩くのが好きである。そうするといろいろなトラブルが起こることは想像に難くない。たとえば、Cくんは給料の中から千円札を小袋に入れて外出し、それを使い切らないと気が済まない。買い物した残りの小銭は喫茶店の募金箱に入れてしまう。一時は募金箱を長い時間いじっているので、金を盗ろうとしているのと間違えられ、警察に補導されたこともあった。今になればそれは募金箱を研究していたのであることが分かるのだが。現在は、ひとりで外出して何も問題はないが、ある時期はお金を払わずに買い物をしたり、蕎麦屋で食べてお金を払わないで出て来たりした。そういうとき、母親はすぐに行ってお金の使い方を教えたり、店員さんと親しくしてCくんに声をかけてもらったり、この子が店での振る舞い方を学ぶように一生懸命になった。私共の学校を卒業した後も、よく店から電話がかかり、職員が助けに出かけた。ことばを話さない子どもが何を考えているのかは、店の人には分かりにくい。どうしても中間に立つ人が必要である。この子によってこの母親が人間的に

成長していく様子が私にもよく分かった。幼児のときから担任をしていたI先生は、この子が小学校を卒業した後にも、トラブルを起こす度に、この子が何を考えているのかを母親と一緒に考えつづけた。

Hくんは、幼児のときから、突然大発作を起こし、自分の身体を快適に維持するのが大変であった。いま、私よりも背が高くなったその子を、父親が面倒を見ているのがこの日印象的であった。食べさせるとき、父親はHくんに合わせて上手にリズムをとってスプーンをこの子の口に運んでいた。私共も同じ苦心をしたのだが、子どもの方もその頃よりも上手にスプーンに自分を合わせている。食事が済むと父親の足元で横になり、両手で紐を引っ張った。自分の仕方で動いていればこの子は幸せなんです、と父親は言った。かつて私もこの子と長時間付き合うのは大変だったが、その「時」には不思議な平和があった。この父親は、この同じ体験をしていた。

この日来ていた別の母親が言った。「学校の先生たちは、歩けない子どもを歩かせてあげようとしたり、車椅子に乗った子どもを介護して、たくさん面白いことをしてあげようと思う。自分の期待から、子どもの頭越しに何かをしてしまう。善意からなのだが、そのために小さなサインを見落としてしまう。その子の気持ちを察しない。普通の人と障害児

とを別の世界において、介護してあげるというのではなくて、皆一緒に生きているのが私たちの生活なのにね」と言って笑った。

＊

最近、子育て支援ということが新聞にもよく言われる。保育施設は何を支援するのか。母親が働くことを支援するのか。それは子育て支援の根本ではない。子どもを育てることを支援するのである。母親が子どもをおいて立ち去れば、幼い子どもは存在の根底を揺るがされる。母親にも葛藤があるだろう。そんなときに子どもの示す行動をどう見るのか、どうかかわるのかを一緒に考えることをしないで、親が働くことを支援するだけでは、子どもの視点からの子育て支援ではない。

ＯＭＥＰ世界大会では、この社会変化の時代に親も子も人間として成長するための「子育て支援行政」をめぐってシンポジウムが行われる。

（愛育養護学校）